

---

# メダロット+

メダロッター R y u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メダロット+

### 【Nコード】

N5842Y

### 【作者名】

メダロット+RYU

### 【あらすじ】

メダロットより約三年・・・、

これは一人の少年とメダロットの出会いから始まり数々の仲間、ライバル、そして「トモダチ」との出会い、戦いを繰り広げる少年少女、メダロットたちの物語・・・。

そして未来の少年たちへつなぐ物語でもある・・・。

## Memory Disc 0 プロローグ(前書き)

初めまして、RYUです。

初めて書く小説ですが、それでも読んでくれると言う人は読んでください。

では始まりませす、メダロット+の世界をお楽しみください。

## Memory Disc 0 プロローグ

時は近未来……

世間では「メダロット」同士を戦わせる「ロボット」という遊びが大流行していた。

ある年、「魔の十日間」と呼ばれる事件が起きた。

しかしその事件は一人の少年とメダロットによって終演を迎えた……

それから約三年、一人の少年と一人のメダロットの出会いから新たな物語が始まる……

「……カ……ル」

「……うーん」

「ヒ……ル！」

「……」

「ヒカルってば！」

「……！」

僕は誰かに呼ばれ目を覚ました。

「・・・なんだ、キララか、おどかすなよ・・・。」

「おどかすなよ、じゃないわよ、小学校生活最後の夏休みが始まるって言うのに居眠りしてるなんて信じられないわ。」

起きた途端にここまで言われるとは・・・反論出来ないからしょうがないが。

「まあいいわ、・・・所でヒカル、あんたこのクラスの友達の事覚えたの？」

「・・・三年の頃から一緒の人達しか・・・。」

「あんた・・・。」

僕の言葉にキララは怒った表情を見せたが、すぐに呆れた表情で僕を見た。

「・・・じゃあ、せめてこのクラスで注目されている子ぐらい覚えておきなさい、いいわね、よく聞きなさい。」

キララがそう言ったので僕は話を聞くことにした。

「まず名前は「獅童 かい」、成績優秀で学年でもトップの学力ね、それで運動神経も抜群、これだけ聞けば完璧な人物だけど・・・。」

「致命的に口が悪い、のよね。」

キララが話していると、一人の女の子が話の間に入ってきた。

「イセキ！」

「で、なんであんだ達あいつの話をしているの？」

「ヒカルがこのクラスの人のこと全然知らないって言うから離した所なのよ。」

「ふうん、じゃあ続きはあたしが話すわ。」

するとイセキがキララに代わって話を初めた。

「さつきも言っただけだけどあいつは口が悪いからね、まともに話もできないから友達ができないの、目付きも悪いからみんな恐がって近寄らないしね……、話相手と言えばあたしぐらいなもんよ。」

「……へえ、わかったけど、なんでイセキがそんなこと知ってるんだ？」

「まあ、何て言うかあいつとは幼馴染みってやつだからね、大体のことは知ってるわね……。」

「そうなんだ……、でも珍しいなイセキから話しかけてくるなんて。」

「たまにはいいじゃないの。」

俺がそう言つとイセキは軽くながして話しを続けた。

「まあ、そう言う性格のせいで友達ができないから強がってさ、あれであいつさみしがり屋なのよね……。」

「おい。」

side - かい

イセキのやつが何か話してやがる・・・、ちっ、どうせまた有る」と無いこと吹き込んでやがるな・・・

「おい。」

「へっ?」

「てめえまた有ること無いこと吹き込んでやがったな・・・」

「そ、そんなわけないでしょ、あたしがあんたの事を面白おかしく話して何の特になるって言うの?」

「てめえは昔から事ある事にオレの事を変な風に他人に話してやがるだろうが!!」

「(あー、やっぱこいつめんどくさいわ・・・)」

「二人とも仲がいいわね。」

「「よくない!!!!」」

オレがキララとか言うやつに反論するとイセキのやつも同時に言葉を発した。

「真似すんな!」

「あんだこそ！」

「あつ、あのさー！」

オレたちが言い合いを始めるとヒカルってやつが話しかけてきた。  
一体何のつもりだ……？

「かいくんってどんなメダロットをもってるの？」

「……ああ？」

「……どんなメダロットもってるのかなーって。」

「………」

ちっ、めんどくせえ、オレはメダロットもってねえんだよな……。

7

「こいつメダロットもって無いのよ。」

するとイセキのやつがオレがメダロットをもっていないことを言った。……余計な事を言いやがって、くそっ！

「……メダロットなんてどこが面白いんだ……！」

そう言ってオレは自分の席に戻った……。

「オレ、なんか悪い事を聞いちゃったかな……。」

「ああ、気にしないでいいわ、すねただけだから。」

「うん・・・。」

(しょうがないわね・・・)

放課後・夜

かいの家

「メダロットか・・・」

(あいつ元気かな・・・)

・

・

・

・

「ごちだよ、」

「!」

『待って下さい どの、そんなに走ると危ないですよ!』

「わるいわるい、でもボクたまにしか とおじいちゃんのことにあそびにいけないからうれしくてさ。」

『大丈夫ですよ、時間はたっぷりありますから。』

「うん!」

「……いつの間にか寝ちまったのか、もう朝か……。」

「かい~~~~!」

すると下から母さんの声がした。

「イセキちゃんがきてるわよ~~~~!」

イセキが……?、あいつ夏休み初日から何のようだ……?

「か~~~~!はやくおりてこないとかあさんないちゃ~~~~!」

「今いくよ!」

母さんに泣かれるのは面倒だ、……しょうがない、行くっ。

オレは階段を下りて玄関に向かった。

「……何だよ。」

「さあ、出かけるわよー！」

「は？」

いきなり何言ってるんだ、こいつ。

「メダロット研究所に行くのよ、はやくしなさいー！」

「……なんでだよ、オレ別にメダロット興味ないし……。」

「今はそうかも知れないけど見学に行けば興味がわくかもしれないでしょ、それにこんな「可愛い女の子」からの誘いを断るって言うの？」

「そうよー、かあさんもそうおもってる。」

「……自分で可愛いって言ってる時点で可愛くねえよ。」

「なんか言ったかテメエ。」

「……いや何も言ってねえ。」

「そう、なら早く行きましょう。」

「……」

オレは半ば強引に研究所につれて行かれた。

メダロット研究所

「へえ、結構立派なんだな。」

メダロット研究所はオレが思っていたよりも立派だった。

「でも、入れるのか？」

「大丈夫よ、見学だけならタダだから。」

「そうか……」

そして俺たちは研究所の中に入った。

「まずは……展示されてるメダロットを見ましよう。」

「ああ……。」

オレは言われるがままにメダロットを見に行った。

「……」

俺が思っていたよりもメダロットの種類はすごかった。

「どっ、すごいでしょ、でもまだこれで全部じゃ無いのよ。」

「そうなのか!？」

「ええ、今のところ七十体以上もの機体が出てるわ。」

「へえ、七十体が、すげえな……。」

「しばらく見ていたら?、ちょっとある人に話つけてくるから。」

「ああ。」

そう言つとイセキはどこかへ行ってしまった。

言う通りしばらく眺めてるか……。

「DOG型シアンドッグ、こいつは射撃が得意なのか、CAT型マゼンタキャット、たしかイセキが持っていたやつか、DGU型ドンドグーか、変な顔だな……。」

いまいち興味をそられるメダロットは見当たらなかった。

「……うん?こいつは」

そんな時ふとオレの目にうつったのは……

「KWG型……ヘッドシザース……。」

オレの興味はそのメダロットに向いた、が、その時……。

「かい!」

「うわ!？」

「博士に会いに行くわよ！」

「……いきなり声をかけんなよ、びっくりするだろうが……。」

「ボーっとしてるあんたが悪いんでしょ。」

これ以上なんか言つと言い合いになりそうだ、黙ってた方が良さそうだ。

「……。」

「……何黙ってるのよ、気持ち悪いわね、行くわよ。」

そしてオレたちは博士のところに向かった。

「博士、連れて来ました！」

「おお、イセキ君、彼が獅童かい君か。」

そこにいたのは白衣とサングラスのじいさんだった。

「あんたがメダロット博士……。」

「うむ、わしがアキハバラ アトム、メダロット博士じゃ。」

「どづも……。」

「……ところでキミはメダロットに興味があるかね？」

博士は突然オレにそんな質問を投げかけてきた。

「……はい！」

「うむ、いい目じゃ、わしがメダロットについて教えてやるう、と言いたいところじゃが……生憎忙しくて、代わりと行っては何じゃがこれをやるう。」

博士から渡されたのは名札だった。

「これは……？」

「入ってすぐ横に扉があったじゃろ、そこにはわしの孫のナエがいるんじゃが、やつはわしの次にメダロットに詳しいと行っても良いじゃろう。」

「つまりこれがあれば部屋に？」

「うむ、それじゃあ楽しんで来るが良い。」

「ありがとうございます！」

オレとイセキは博士の孫のところへ向かった。

ウィーン……

「失礼します……。」

部屋に入ると長い黒髪の女の子がいた。

「あら・・・？」

「久しぶりね、ナエちゃん。」

「イセキさん・・・どうもお久しぶりです！」

どうやら二人は知り合いみたいだ。

「実はこいつあたしの幼馴染みなんだけどメダロットのことを教えてやって欲しいの。」

「はい、わかりました、えっと・・・」

「獅童かい、かいでいいよ・・・。」

「はい、よろしくお願いします。」

・・・可愛いな、イセキとは大違いだ。

ガッ！

「っ!？」

いきなりオレの足に激痛が走った。

「・・・なんかあんたいつもと態度違うくない？」

「このやる・・・」

「……………」

「……な、何？」

気が付くとナエちゃんが俺たちのことをじっと見つめていた。

「お二人とも、仲がよろしいんですね。」

「断じて良くない!!」

「ふふ、それではメダロットについてでしたね、始めますけどいいですか？」

「待つて、メダルとは何かってところから話してやって。」

「は、はい。」

そしてナエちゃんの説明が始まり、オレはしばらく真面目に聞いた。

「と言う事です、わかりましたか？」

「ああ、ちゃんと聞いていたから大丈夫だよ。」

「そうですね、よかったです……。」

「じゃ、そろそろ帰りましょうか。」

突然イセキがそう言った。

「もうそんな時間か？」

「もうお昼だし、帰った方がいいでしょ。」

「それもそうか・・・（また来ればいいしな・・・）。」

ドオオーーーーッ！！

「な、なんだ!？」

「博士のいた部屋の方からよ!」

「おじいさまの!？」

突然ナエちゃんが走り出したが、それをイセキが引き止めた。

「待ちなさい、一人じゃ危険よ、あたしも行くわ。」

「は、はい、わかりました!」

俺たちは一旦部屋から出た。

一体何が起きているんだ・・・？

しばらく走っているとオレたちはとんでもない光景を目にした・・・。

「メダロットたちが、研究所を破壊している!？」

「これは急いだ方が良さそうね・・・、かい！あなたは部屋に戻ってなさい。」

「な、なんだと・・・！」

イセキの突然の言葉にオレは頭にきてしまった。

「ふざけんな！なんでオレだけ逃げなきゃなんねんだ！？」

「あんだ、メダロット持ってないでしょ？」

「っ・・・！」

悔しかったがオレは何も言い返せなかった。  
紛れもない事実だからだ・・・。

「・・・」

ダッ！

「・・・ごめんね、かい。」

しかしその時オレは知るよしもなかった・・・、この後オレにとつて運命を変える出会い、いや再会があることを・・・。

M  
e  
m  
o  
r  
y  
  
D  
i  
s  
c  
  
1  
に  
続  
く  
.  
.  
.  
.

## Memory Disc 0 プロローグ（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回から本格的に始まります。

興味を持って頂けた方はどうか  
かいたたちの事を見守ってやってく  
ださい！

ではまた！

（ノシ）

Memory Disc 1 新生コンピュータ誕生！かいとロクシヨウ（前書き）

今回はロボットがあります。

楽しんでください！

修正しました！

これで読みやすくなったかと。

オレはイセキに言われた通りに部屋に向かって走り出した……。  
くそっ！、オレにもメダロットさえあれば……。

オレの中でそんな感情が渦巻いた。

「……戻ってきたけれど……。」

もちろんやることなど何も無い、オレはここで指をくわえて見ている事しか出来ないのだ……。

『まだ、こんな所にも人間がいたか。』

「っ!？」

『安心しろ、苦しみは一瞬で済ませてやる。』

突然声がして振り向くとそこにはKTN・OX、ア・ブラーゲのパーツをつけたメダロットがいた。

あ、あいつまさかオレを殺そうとしてんのか……？  
い、いや大丈夫だ、メダロットは三原則がある、  
人間を傷つける事は……

オレがそう思った瞬間だった。

ザシュッ！

「……っ！？、うわあ……！！！」

オレの腕には二本の切り傷が残っていた。

『まさか三原則があるから攻撃出来ないとも思ったのか？、生憎俺はそんなくだらないモノからは解放されている……！！』

や、ヤバい……、想像していたよりも相当ヤバい……、オレは死ぬのか……？、嫌だオレはまだ死にたくない……！！

『……われらの理想のために死ぬ。』

誰か、助けてくれ……！

ガキインツ！！

……あれ？、攻撃が止まった……？

オレが目を開くとそこには白いクワガタムシのメダロットがいた。

『ぬう……！？』

『……大丈夫でござるか？』

「……ああ。」

オレは突然の事に驚いて状況を把握できなかった。  
しかしこれだけはわかっていた。

こいつはオレの味方だと……。

『拙者が奴を倒す、おぬしはそれまで動かない方がいい。』

そう言うときいつはキツネ型に向かって言った。

『ふはははは、久しぶりに楽しめそうだ!』

『斬り捨て御免!』

キイーン!

二人の剣がぶつかりあい火花を散らす。

メダロツチが無いので正確にはわからないがまだ二人ともまだダメージは無いだろう。

『ふん見かけだけのクワガタでは無いようだな。』

『貴様こそ。』

二人の戦いはすごいものだった。お互いに一步も引かない物凄い攻防だった。

「すげえ……。」

『ふ、クワガタムシ、オレの腕にばかり注意が向いてるんじゃないか?』

『なに?』

腕にばかり……?、あいつまさか!

「よける！ブレイク攻撃がくる！」

『……！』

『ミカツチ……！』

ブウウン、ドオツ！

『はっ……！』

ギリギリでクワガタはブレイクをかわした、よかった役に立てたみたいだ。

『……助かった、少年。』

「ああ……、ところで頼みがあるんだ。」

『なんでござるか……？』

「一緒に戦わせてくれ。」

『……！、……解った共に戦おう。』

「ああ！」

オレはこのまま見ていただけなんて嫌だ、その気持ちがこの答えに導いた。

『指示は任せただござる。』

「おう！」

『ふん、人間が着いた位で調子に乗るな！！』

『いくぞ！』

そう言うとクワガタはキツネに向かって走りだした。

「チャバラソードで攻撃！」

『はあっ！』

キイイン！！

『むっ！？、・・・でえええいつ！！！！』

「かわしてピコペコハンマーだ！」

『ふっ！、はあああっ！！』

『ぬっ、ふんっ！！』

「かわされたか！」

『な、なんだこいつらは・・・、さっきよりも動きが数段良くなっている・・・！』

「・・・」

どう来る・・・？

『ぐっ、うおおー！』

突っ込んできた・・・！

「・・・いいか、恐らくいまやつは冷静さを失っている、だからやつ突っ込んできた勢いを利用して・・・。」

『・・・解つたでござる！』

「・・・まだ、・・・まだだ、・・・、  
『いまだ！』」

ズバアッ！！

あいつは突っ込んできたキツネをチャバラソードで返り討ちにした。  
・・・！

『ぐっ、バカなっ・・・、この俺がこれ程のダメージを・・・！？』

『・・・』

「やった・・・！」

キツネは胸部に大きな傷がついていた、もう勝負はついたような物  
だろう。

『少年・・・。』

「ああ……。」

クワガタはオレに視線を向け何か同意を得るような顔をした。オレは何を言おうとしたのか大体わかったのでそのまま返事をした。

『拙者は争いは好まぬ、このまま引き上げるがいい。』

『ぐっ貴様ら名は……？』

『……ロクシヨウだ。』

「獅童かいだ……！」

『貴様は……？』

『狐王丸だ、ロクシヨウに獅童かい、覚えたぞ！、次に会う時はこ  
う上手くはいかんぞ覚悟しろ！』

そう言つと狐王丸と名乗つたメダロットは凄いスピードで去って行  
った。

「……はあ。」

長い緊張から解放されオレは安堵の溜め息をついた。

すると部屋に突然イセキたちが入ってきた。

「かい！」

「うおっ！……？」

イセキがいきなりオレの肩をつかみ安否を確認してきた。

「大丈夫！？、さっきあなたの叫び声が聞こえて、ケガとかは！？」

「大丈夫だよ……。」

「って、どこが大丈夫なのよ！、腕ケガしてるじゃない！」

「だからこれくらい大丈夫だって……。」

「そんなわけないでしょ！、早く手当てしないと！」

「帰って自分でするからいいって、少し切られた位だし……。」

「なによ！、あんたあたしがどれだけ心配したと思ってるの！？」

「まあそれくらいにしてやりなさい、特に大きなケガでは無いのじやから。」

しばらくして博士が入って来てイセキを宥めた。

……助かったよ博士。

「どうやら間に合ったようじゃな、ロクシヨウ。」

「えっ！？」

オレは博士が突然そう言った事に驚いた。  
博士とロクシヨウは知り合いだったのだ。

『ええ、言われた通り彼を助ける事は出来ました、ですが……』

「ケガをさせてしまった事か・・・、かい君、君はどう思っておる？」

「え・・・、オレはむしろ感謝しているよ、ロクシヨウが来てくれなかったら死んでたかもしれないし・・・。」

「だそうじゃ、彼は気にしておらん、それどころか感謝しておるんじゃ、そう自分を責めるでない。」

『・・・わかりました。』

ロクシヨウがそう言うと、博士がオレに話しかけて来た。

「実はのかい君、ロクシヨウは三年前にある事件を解決するのに手を貸したのじゃが・・・、その事件が原因でメダロットは登録制となり、多くの野良メダロットたちが居場所を失った、無論ロクシヨウも例外ではなかった、彼はほんの数カ月で多くの物を失ったんじゃないよ・・・。」

「そうだったのか・・・。」

『・・・博士拙者はそろそろ。』

「うむ・・・。」

「待てよー！」

『！・・・』

気が付くとオレはロクシヨウを呼び止めていた。

「なあロクシヨウ、おまえ行くあてはあんのかよ？」

『とくには…………。』

「じゃあオレのところに行いよ。」

『!?!?』

オレの突然の言葉にロクシヨウは驚いた表情を見せた。

「(ほう…………この少年、ロクシヨウを誘うとは思いつた事をするわい。)」

『…………すまないがそれは出来ない。』

「どうしてだよ？」

『拙者にはやらねばならぬ事がある。』

ロクシヨウがそう言う博士が話に入ってきてロクシヨウにこう言った。

「まあ良いではないのかロクシヨウ、しばらくは休んでも、おぬしは良くやっとなる、休暇をもらったと思つての。」

『…………解りました。』

そう言うとロクシヨウはオレの方を向き手を差し出しこう言った。

『これから宜しく頼むかいどの。』

「……………！、ああー！」

こうしてオレとロクシヨウ、新たなコンビが誕生したのであった。

?????side

『只今戻りました。』

「……………」

『報告、メダロット研究所の襲撃失敗に終わりました……………。』

「そう……………」

『申し訳有りません。』

「君ほどの実力があいながら失敗するなんて何があっただんない？」

『実はある人間とメダロットに邪魔をされまして……………。』

「……へえ、君をそこまで追いこむほどのメダロットなのか。」

『いえ、それが……。』

「……?」

『そのメダロット、人間の指示を受けてから動きが突然良くなりまして。』

「……へえ、それでその二人の名前は?」

『えっ?』

「ちょっと興味が沸いたんだ、教えてよ。」

『は、はい、人間は獅童かい、メダロットはロクシヨウです。』

「ふふ、かにロクシヨウか……。狐王丸、もう下がっていいよ。」

『はっ!』

「それと、襲撃の軒だけど僕は怒っていないよ、襲撃の目的は僕たちの力を見せつける為だからね、それに僕はできる限りメダロットも人間も傷つけたくないからね……。」

『はっ!、有り難きお言葉!』

「これからもメダロットと人間の真の理想郷をつくるため、宜しく

頼むよ。  
「

』はっ！、それでは失礼します！』

ふふっ、かにロクシヨウか・・・、面白そうだね・・・。

Memory Disc 2へ続く・・・

Memory Disc 1 新生コンピ誕生！かいとロクシヨウ（後書き）

次回からは平和です。

フツーにメダロットという感じだと思います。

こんな小説でよければ次回も！

（ノシ）

**Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！（前書き）**

今回はメダロットRでお馴染みのあのキャラも出てきます！

それではお楽しみください！

Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！

「……………と言つ訳で、今日から家で住むことになったんだけど。」

『よ、宜しく頼む』

……………やっぱダメか？

「おお……、かい、お前もついにメダロットを始める気になったか！」

父さんは問題無いけど……………。

「……………そう、よろしくね、ロクシヨウちゃん。」

「じ、じゃあ、オレたちは出かけるから。」

「まで、かい！」

「な、なに？」

「彼のパーツだけじゃ組み換えができないだろ？これを持っていきなさい。」

そう言つて父さんは五千円をオレに渡した。

「あ、ありがとう、じゃ。」

そしてオレは急ぐように家を出た。

「やはり男の子はこうでなくちゃな。」

「……ええ。」

## 公園

『どつしたのでいじるか、かいどの。』

「うん、いや……。」

『もしかして母上どのはメダロットのことが嫌いなのか？』

「いや、そうじゃないんだ、ただ母さんはメダロットの話を全然しないからさ……。」

『そつでいじるか……。』

「……なあ、コンビニにうづぜ。」

『う、うむ。』

オレたちは話題をかえ、コンビニへと向かった。

## コンビニ

「来たのはいいけど……。」

特に欲しいパーツとかないんだよな……。

「まあ、見るだけ見てみるか……。」

オレはしばらく棚に置いてあるパーツをながめていた。

「……なあロクシヨウ、これなんかどうだ？」

『……メガフロント？』

なぜかロクシヨウの目が冷たくなった気がした。

「……どう思う？」

『なんとなくそれは嫌なのでござるが……。』

「別に全部つけなくてもいいんだぜ？」

『……左腕意外取り換えられそうでござる。』

「……わかった、そんなに嫌ならやめとくよ。」

……ロクシヨウはメガフロントに嫌な思い出でもあるんだろうか？

特に買う物も無いのでオレたちはコンビニを出ることにした。

すると聞き覚えのある声がした。

「かいー！ー！！」

「何だよイセキ、そんなに慌てて？」

「あんた研究所を襲ったメダロット達を追い返したでしょ、その噂を聞きつけたあるメダロッターに目をつけられたの！」

「……それでそのメダロッターってのは？」

「竜崎 蓮次、通称恐竜使いの「REX」よ。」

「れ、REX……で、誰だ？」

オレがそう言うといセキはずっこけた。

「……あんた本当になんも知らないのね。」

「……」

「竜崎はこの辺じゃ名の知れたメダロッターよ！」

「……あ、ああ。」

「それでもって竜崎のやつは三日後に対戦したいって言っていたわ。」

「三日後か、そうと決まれば特訓だな、行くぜ、ロクシヨウ！」

『うむ。』

「待つんだ、君たち！」

すると突然誰かから声をかけられた。

「君たち竜崎と戦うのだろうか？、だったら僕に特訓をつけさせてくれないかい？」

「・・・誰だあんた。」

「すまない、名乗るのが先だったね、僕は大村 鱒次九郎、ジックと呼んでくれ。」

「・・・で、何でそのジックさんがオレ達に特訓をつけてくれるんだ。」

「竜崎とは少しね・・・、それに今の君たちでは竜崎には勝てない、それだけじゃダメかい？」

「・・・竜崎はそんなに強いのか？」

「ああ、少なくとも今の君たちでは敵わないだろうね。」

「・・・あなたに特訓をつけてもらえば勝てるってのか？」

「僕は力を与えるだけさ、勝てるかどうかは君たち次第だよ。」

「おもしれえ、だったらうけてやるぜ、あんたの特訓を！」

「そつでなくっちゃ面白くない、早速始めよう!」

「おう!」

「えっ、ちょ、ちよつと待ちなさいよ!」

こうしてオレとジックさんの特訓が始まった。

ジックさんの特訓はとても厳しいものだった、だけどオレたちは諦めずに最後までやりとげたんだ!

三日後

商店街

「……逃げずにやってきたみたいだな!」

「……イセキ、竜崎って高校生だったのか?」

「言っでなかったっけ。」

「聞いてねえよ!」

「別にロボトルの強さに年齢が関係する訳じゃないんだからいいじ

「やない！」

「おい、お喋りはそこまでにして、さっさと始めてくれないか？」  
しばらくオレたちが話していると竜崎にそう言われた。

「お、おうー！」

「この勝負、合意と見て宜しいですね？」

「おお！何だこのオッサン！」

「ロボットル協会公認レフェリーのMr.うるちだ、お前そんなこと  
も知らんのか？」

「わ、悪いかよ？」

「別に構わんさ、俺が興味あるのはお前の実力だ。」

「・・・始めてくれ、うるちさん！」

「それでは、ロボットルうー、ファイトおーー！！！」

やつが出してきたメダロットは恐竜のようなメダロットだった。

「いけ、アタックティラノ！」

『グオオオツー！！』

アタックティラノはいきなりハンマーを降り下ろしてきた！

『くっ!』

ロクシヨウも何とか避けることはできたが……あのハンマー凄  
い威力だ。

『グオアアアア!』

ブウンッ!

ブウンッ!

『くっ、当たったらひとたまりもないな……。』

「ふん、ちょこまかと、ティラノ!、ブレスファイヤーだ!」

『グオッ!』

ブオオッ!

『ぐあっ!』

「頭部に16ダメージ」

ティラノの頭部から吹き出した炎にロクシヨウが直撃してしまった。  
。。。

「大丈夫か、ロクシヨウ!」

『ああ、心配は要らぬ!』

少し見くびっていたかも知れないな……ジックさんに聞いてい

たよりもずつと強い……。

「ふっ、少しは抵抗してくれよ、それともその武器は見せかけか？」

「くっ、オレたちを甘く見るなよ！、ロクシヨウ、チャンバラソードだ！」

『でえええい！！』

「迎え撃てテイラノ！」

『グオツ！』

闇雲に突っ込んだって返り討ちにあっただけ、それぐらいわかっていたさ！

「ロクシヨウ、跳べ！」

『承知！』

「なに！？」

高く飛び上がるロクシヨウ、突然のことにテイラノも反応できなかったようだ。

『くられえ！』

ズバツ！

『グウ……！？』

「右腕に20のダメージ」

「よし、ロクシヨウ、畳み掛ける！、ピコペコハンマー！」

『うおおおー！』

「くっ、調子に乗るなよ、ガキが！ストライクヒット！」

『グオアアアアー！』

ズドオオン！

『！？』

「ロクシヨウ！？」

「左腕に40のダメージ、左腕パーツ、破損、脚部に10のダメージ」

「ふ、バカが、むやみやたらにがむしゃらの行動を使うからだ！」

「くっ、しまった・・・、うかつだった・・・！」

そくだ、がむしゃらの行動を行った後は大きく体制を崩してしまう・・・。

完全にオレが勝負を急いだせいで。

『大丈夫だかいどの、拙者にはまだ自慢のチャンバラソードが残っている！』

そんなオレをロクシヨウは励ましてくれた。

・・・そくだよな、後悔するよりも勝つための作戦を考えなければ。

「ありがとう、ロクシヨウ、・・・オレに考えがあるんだ、乗っ  
くれるか？」

『無論！』

「今残っているパーツから導き出せる答えはこれしかない、アンテ  
ナで命中精度を上げて頭を一撃で破壊する・・・！」

『・・・承知した！』

辛うじて脚部は破壊されなかった、これなら攻撃をかわしつつ索敵  
行動を行える！

「ロクシヨウ、アンテナ！」

『おう！』

ブウン ブウン・・・

「・・・何を狙っている、・・・やれティラノ！ストライクヒット  
だ！」

『グオオオオ！』

ブオンツ！

『ふん！』

ブオンツ！

『はっ!』

「ちっ、ちょこまか逃げ回りやがって!」

『グオオオオオツ!』

ブオンツ!

「いまだ! チャンバラソードだ!」

『うおおお!』

「な、何!」

ズバアツ!!

ロクシヨウの攻撃はティラノに命中した、だが……。

「脚部に55のダメージ、脚部パーツ、破損」

「ふっ、どうやら狙いがずれたようだな!、とどめだティラノ!!」

『まだまだ、拙者たちの攻撃はまだ終わっていない!』

「何!??」

『うおおおおお!』

ズバアアアツ!!

『グオアアアアツ!?!』

「頭部に50ダメージ、頭部パーツ、破損、アタックティラノ機能停止」

「ばっ、バカな!?!」

「リーダー機、機能停止!、そこまで!、勝者、獅童かい!」

「よっしやー!?!」

『ふっ……!?!』

こうしてオレたちは初のロボットに勝利した。

「終わったようだな。」

するとジツクさんがやってきた。

「ジツク……!?!」

「気は済んだか、竜崎。」

「えっ!?!」

オレにはよく状況がよく理解できてなかった。

「二人とも知り合い……?」

「ああ、竜崎は僕の友人さ。」

「ええっ！？、じゃ、じゃあどうしてオレに特訓を！？」

「竜崎が君の噂を聞いてね、戦ってみたいなんて言い出すから……」

「余計なことを……。」

「でも、こうでもしなきゃ彼はお前に勝つことはできなかった、それともお前は弱い者いじめがしたかったのか？」

「……わかったよ、俺が悪かった。」

「これに懲りたら見境なく他人にロボットをふっかけるのはやめてくれよ。」

「……ああ、そうするよ。」

すると竜崎……さんがオレの方に向き直って話かけてきた。

「かい、お前の実力は想像していたよりも高かった、正直驚いたよ、……それにしても気になることがある。」

「研究所襲撃の事ですか？」

オレは竜崎さんが気になることがあると言ったのでそう聞いた。

「ああ、一体誰が何の目的でやったのか……、メダロットたちだけの犯行なのか、それとも裏で誰かが糸をひいているのか……。」

「確かに気になるな……、一応僕の方から博士に調査してもらうように伝えておこう。」

「ジックさんは博士と知り合いなんですか？」

「ああ、博士には色々とお世話になっているよ。」

「はあ……。」

「今日はもう帰った方がいいんじゃないかい？、ロクシヨウのメンテナンスもした方がいいだろうし。」

「あ、じゃあそうします。」

「……何かあたし会話に入っていけてない気がするんだけど。」

「気にすんなよ、早く帰ろうぜ。」

「こづして色々あったけど今日は無事に過ぎて行った……………」

Memory Disc3に続く……………」

Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！（後書き）

今回は二人ともメダロッチをつけていたのでゲームに近づけて見ました。

戦闘描写など上手く書けているかわりませんが、もっとこうした方がいいなど意見があれば言ってください。

では。

（ノシ）

Memory Disc 3 田中と田中 (前書き)

今回は平和な話です。

ロボットは控えめです。

では楽しんでください！

「……………ああ、暇だな。」

『そついでいじめるな。』

昨日は色々あった分、今日が余計に暇に感じた。

「出かけるかな……………」

暇だったのでとりあえず出かけることにした。

街中

何かをするわけでもなくオレは街をぶらぶらと歩いていた。

すると……………

「……………ん？あいつは確か……………」

『ヒカルどのだ……………』

しばらく歩いているとヒカルってやつを見かけた。

とりあえずオレは声をかけることにした。

「おい。」

「え、ああ、かいくん、それにロクシヨウ・・・？」

「こんなところでなにしてんだ？」

「いや、暇だったから少し歩いてたんだ。」

なんだ、オレと同じか・・・。

「だったら誰かとロボトルすればいいんじゃないか、おまえくらい有名なら相手なんていくらでもいるだろ。」

「はは・・・、実はそうもいかないんだ。」

「・・・？」

「少し場所を変えて話そう・・・。」

ヒカルがそう言ったのでオレ達は場所を変えて話すことにした。

「・・・そうか、有名すぎるのも考えものだな。」

オレはヒカルから三年前の事件の事などを聞いた。

「うん、あの事件以来一部の人を除けばオレにたいする反応が変わってしまった気がするから・・・。」

「・・・」

「そう言えばどうしてかいくんはロクシヨウと？」

「ああ、実はな……。」「

オレはこの前あつた事をヒカルに話した。

「そうか、そんなことがあつたのか……。」「

「まあ、なんで研究所が襲われたのかはわかんないけどな。」「

「そう……。それにしても研究所を襲ったメダロットたちは何者なんだろうね？」「

『あの狐王丸と言うやつ、ただの野良メダロットにしては強すぎる。』

「もしかしたら誰かの命令で動いていたのかも知れないね。」「

『まあどんなやつでもオレだったら楽勝だけどな！』

しばらく話しているとヒカルのメダロットであるメタビーも話に加わってきた。

「じら、メタビーー！」「

「ずいぶん元気がいいんだな、おまえの相棒は……。」「

「ははは……。」「

「オレもロクシヨウとおまえたちみたいになりたい関係になれるのかな……」

「うん、きっとなれるさ、オレたちみたいな感じではないだろうけど。」

「ああ……。」

「……それにしてもかいくんとこんな風に話しができるなんて思ってたかったな。」

「……えっ？」

その言葉に少し驚いたが理由は大体わかったので話を続けて聞く事にした。

「最初見た時の印象はちょっと恐かったから。」

「はは、やっぱそうか、でもオレもイセキ以外のやつとこんな風に話したのは久しぶりだ、楽しかったぜ。」

「それはよかったよ、じゃあまた今度。」

「ああ、またな。」

そう言ってオレはヒカルと別れた。

「・・・本当に久しぶりだぜ、あんなにしゃべったのは。」

『よかったでござるな。』

「ああ。」

ドンッ！

「・・・おっと、ごめんよ。」

歩いているといきなり誰かにぶつかられた。

それにしても不自然なぶつかり方だったな。

「うん？、あつ、サイフがねえ!？」

『もしやさっきの男!』

「待ちやがれ!」

オレは急いでさっきの男を追いかけた。

「待ちやがれ!この野郎!」

「ん、げっ、追いかけて来やがった!」

『まて!』

「まてと言われて待つやつがいるか!、・・・にしても足の早いガキだぜ。」

「自慢じゃねえが運動神経はいい方なんだよ！」

しばらく走っているとスリの目の前に人が立っていた。

「どけ！」

「・・・ふんっ！」

するとその人はスリを突然投げ飛ばした。

「うわあ！」

ドンッ！

「なっ、なんなんだ、てめえは！？」

「僕か？、僕はセレクト隊隊長、竜崎正義だ。」

「せ、セレクト隊！？、あのロボロボ団と繋がってやがった？」

「それは三年前の話だ、それにしても君はなにをしたんだ、あの少年に追いかけられていたようだが？」

「うっ、そ、それは・・・。」

「そいつオレのサイフスリやがったんだ！」

「そうか、なるほど・・・ならば捕まえなければいけないな。」

「ぐっ、クソおっ、こうなったらロボットだ！」

「僕とロボットか、いいだろう！」

「タンクソルジャー転送！」

「こい！、バオリキシー転送！」

「なんだ、あのメダロット!？」

オレはセレクト隊の人が出したまるで恐竜の化石のようなメダロットに驚いた。

「なんだあ、そのゴツいだけの骨野郎はやる気あんのか？」

『……………』

「覚悟はいいか、ロボットファイトだ！」

「ハチの巣にしちまえ、タンクソルジャー!!!」

『了解!』

ズドドドッ!

タンクソルジャーの弾丸がバオリキシーに向かって飛んでいく。

「避ける、バオリキシー。」

『……………』

ドン、ドン、ドンッ！

バオリキシィはタンクソルジャーの弾丸をすべて回避した。

「す、少しはやるようだな！」

「終わらせる、バオリキシィ、アンガデコレトで叩き潰せ。」

『……………』

その瞬間バオリキシィはタンクソルジャーの目の前に瞬時に移動し左腕を降り下ろした。

グシャッ！

「頭部に70ダメージ、頭部パーツ破壊、タンクソルジャー機能停止」

「う、うわあ、そんな！」

「すげえ、一撃で倒しちゃった！」

「さあ、来てもらおうか。」

「クソ、こうなったら逃げるが勝ちだ！」

「あ、までよ！」

スリは逃げようとしたがその先には……

「逃がさないであります!」

「クソ、ならこつちに……!」

「通さないであります!」

男はすでに囲まれていた。

「ご苦労様であります、隊長。」

「ああ。」

「……あの、オレのサイフ。」

「ああ、そうだったね、おい!」

「わ、わかったよ!返しゃいいんだろ!」

男はサイフを取り出しオレに向かって放り投げた。

「あー、よかった……。」「

「じゃあ僕はこれで……。」「

「あの、待ってくれ!」

オレは気になった事があったので隊長さんを引き止めた。

「なんだい?」

「たしかあんた竜崎って……。」

「……？、ああ、もしかして君も弟に？」

「弟って竜崎蓮次の事か？」

「ああ、やっぱり君も弟にロボトルをいどまれたんだね、大丈夫だったかい？」

「いや、別に勝てたし、ロボトルが終わってみれば案外いいやつだったし。」

「驚いたな、蓮次に勝つなんて……、すごいんだな君は。」

「いや、そんな……、ロクシヨウがいてくれたからです。」

正義さんはすごいと言ってくれたがオレだけの力で勝ったんじゃない、ロクシヨウがいてくれたからだ。

「そう言えばあいつ、なんかセレクト隊がロボロボ団とどうとかって……。」

「ああ……、三年前に魔の十日間と言う事件があったのは知っているね？」

「はい。」

「その事件の主犯がセレクト隊の前の隊長でね……、それと同時にロボロボ団の首領でもあったんだ。」

「はあ……。」

「それ以来セレクト隊は信用を失ってね……。」

「そうだったんだ……。すいません変な事聞いちゃって。」

「いいんだ、事実は事実だからね、それに僕には自分の正義がある、僕にとってはみんなが平和に暮らしていければ自分がどう思われても構わないんだ。」

オレが謝ると正義さんはそう言った。

「……すごいな、この人、自分たちがどう思われていてもみんなの事を思えるなんて。」

「正義さん、オレはみんなからセレクト隊が信用されていなくても、正義のことは信用します！、だってみんなのことを思える人が悪い人の訳がないから！」

「……ありがとう、君の名前は？」

「獅童かいです。」

「そうか、君のような少年達のためにも頑張らなければ……。」

「あ、もうこんな時間だ！、じゃあオレはこれで。」

『・・・優しい心を持った少年ですね。』

「ああ、彼のような子供の達のためにもオレたちが正しくあらねばな。」

『・・・ええ。』

かいの家

「ただいま。」

『ただいまもどった。』

「おかえりなさい、かいゴハンできてるわよ。」

「母さん。」

「ロクシヨウちゃんもおかえりなさい。」

『う、うむ。』

「さあ、かいはやくあがりなさい。」

「うん。」

オレは母さんに言われて家に上がり御飯をたべた。

そしてやることも無いのでもう寝ることにした。

お休みなさい……。

ロクシヨウside

かいどのは寝てしまわれたが拙者は少し考え事をしたい気分だったのでもう少し起きている事にした。

『うむ……。』

「ねえ、ロクシヨウちゃん、ちょっといい？」

『……？、かまわないでござるよ。』

母上殿に声をかけてきてそう言ったので拙者がまわないと答えた。

「……ねえロクシヨウちゃん、今かいはどんな感じ？」

母上殿はかいどの事を聞いてきた。

『特にこれと言って変わった事はないでござる。』

「そう、あなたは？」

今度は拙者の事を聞かれたので拙者はこう答えた。

『拙者も大丈夫でござる。』

「そう・・・かいの事、よろしくね。」

『うむ、わかった。』

「あなたも気をつけてね。」

『う、うむ。』

かいどのの事をたのむか・・・、母上殿はかい殿のことを本当に  
思ってたっしやるのだな。

拙者もそろそろ休むとするか・・・

『お休み・・・。』

「機能休止します、お休みなさい」

Memory Disc 4 続く・・・

Memory Disc 4 夏だ！、海だ！、シャチだ！？（前書き）

今回は海でロボット！

さらに始めてのチーム戦闘です！

Memory Disc 4 夏だ！、海だ！、シャツだ！？

今日は父さんの仕事が休みで海に連れてってもらえることになった。どうせなら大勢の方が楽しいと思ったのでヒカル達やイセキもさそった。

海

「海にきたのいいが・・・」

正直な話、オレは別に海に行きたかった訳では無い。

だからやることもないし暇だった。

「かーーーーー！、父さんと一緒に泳がないかーーーー？」

「相変わらずね、あんたのお父さん・・・。」

「一番はしゃいでるんじゃないかな・・・。」

「子供みたい・・・。」

オレの父さんのはしゃぎっぷりに三人とも呆れていた。  
・・・正直恥ずかしい。

「ねえヒカル、昨日かいくんと街で会ったんでしょ？、仲良くなれたの？」

「うん、オレはなれたと思ってるけど。」

「かいくんに聞いて見たら？」

「いいよ、友達って言うのはいつの間になってるものだと思うから。」

「へえ、案外まともなこと言うようになったのね。」

「なんだよそれ……。」

「どうしたんだ二人とも。」

「なんでもないよ……。」

ヒカルとキララが話していたので声をかけてみたが、なんでもないとされた。

顔はそう言っただけだったが……

「まあ、とりあえず遊ぶか。」

「それもそうね。」

そしてオレたちは泳いだり、スイカ割りをしたりと海を楽しんだ。

「……ちょっと休むか、それにしても……。」

オレは少し気になった。

「ロクシヨウ、ゴミがけっこう落ちてんだよな……。」

『うむ、マナーの悪い者が捨てていったのだろっ……。』

オレたちは少し悲しい気持ちになった。

「なあ、ロクシヨウ……。」

『なんでござるか？』

「このゴミオレたちで拾わないか？」

『うむ、いい考えでござるな！』

ロクシヨウは快く賛成してくれた。

「よし、あいつらにも言ってみるか！」

オレはみんなに協力してもらったため集まって話をした。

「ゴミ拾い？」

「ああ、やっぱり海や海に来る人達が安全に楽しく遊ぶためにもさ……。」

「そうだね、ガラス瓶の破片とか危ないし……。」

「自然は大切にしないといけないわよね。」

ヒカルとキララは快く引き受けてくれた。

「父さん、イセキ。」

「なに、あたしがやらないとでも思ってたの？、そんなわけ無いじゃない。」

「父さんだってゴミ拾いするぞ！」

「みんな、ありがとう・・・！」

四人とも快く引き受けてくれた。  
やっぱりみんないいやつらだ。

オレたちは散らばってゴミ拾いを始めた。

洞窟付近

「やっぱり結構落ちてるな・・・。」

オレはロクシヨウとゴミを拾い始めた。

そしてゴミを拾いつづけしばらくたった。

「結構拾ったな。」

『これだけ集めれば上出来でござろう。』

『・・・で。』

「ん……?」

オレたちが話していると近くから話し声がした。

「なんだ……?」

『見ただろう、おまえ達、あの無造作に捨てられたゴミを!』

陰からこっそり覗くと、メダロット達が話していた。

『あのような自然を脅かす悪しき人間は我々の理想の世界には不要!、よって海にいる人間に思い知らせてやるのだ!』

『おおー!』

おいおい、マジかよ……。

『おい海王丸、大丈夫なのだろうな、この作戦。』

『我々の力を持って思い知らせてやればバカな人間も恐れてゴミを捨てるのをやめるだろう!』

『そつづまくいくか……?』

……ん?、あのマリンキラーと喋ってるメダロットは……!

『よし、それでは「待ちやがれ!」』

『!』

オレはやつらの前に姿を表した。

『な、なんだ貴様!?!』

『むっ、おまえは……』

「たまたま見かけたと思っただらとんでもない事考えやがって……、好きにはさせねえぜ!」

『く、また邪魔をする気か!』

『貴様らが無関係な人々を傷つけるつもりなら拙者は何度でも立ちふさがる!』

『のぼせ上がるなよ、小僧ども!』

『まて!』

狐王丸が戦闘体勢にはいると海王丸と呼ばれていたやつが止めに入った。

『ここは私の担当区域だ、貴様には下がってもらおう。』

『そう言う事か……。』

『ちっ!、海王丸、そいつらを甘く見るなよ!』

狐王丸はそう言うのと引き上げ始めた。

『ぬっ、待て!』

ビュンッ!

ロクシヨウが狐王丸に気をとられていると、突然ウェーブによる攻撃が飛んできた。

『くっ!』

『貴様の相手はこの私だあ!』

相手はマリンキラー一体、カネハチ二体か……。数じゃこつちが不利だ……。

『捕まえたるで〜。』

するとカネハチが腕のワイヤーを伸ばして攻撃してきた。

『ちっ!』

「待ちな!」

ズドオツ!

バリバリ!

『ぎゃー!、し、痺れるるるー!』

突如一体のカネハチが電撃によって機能停止した。

「まずは一体ね。」

プシュ〜・・・

煙がでてる・・・、哀れ。

「イセキ・・・。」

「あなた一人じゃ三体も相手できなかったでしょ、あたしも混ぜなさい。」

『ぬお〜〜！、不意討ちとは卑怯なあ！』

「公式ロボットじゃ無いんだし油断してたあなたが悪いのよ、敵は一人とは限らない、覚えときなさい！」

『小娘があ！図に乗るなよ！』

『拙者はシャチを相手にする、マゼンタどのは残りのタコを。』

『あたしに指図しないでよね〜、まあいいけどサ。』

ロクシヨウとマゼンタキャットはそれぞれ敵に向かって走り出した。

『おんのれえええ！』

「ロクシヨウ、チャンバラソードだ！」

『了解！』

ブンッ！

『当たらんぞぉ！』

「なっ！？」

ロクシヨウの攻撃を海王丸は軽々と避けた。

『はっはー！、潜水型の脚部は機動が高い！、闇雲な攻撃が当たる  
ものかぁ！』

「ロクシヨウ、一端下がれ！」

『了解！』

「アンテナ、発動！」

ブウウウン……

『む？、バカめ、すきだらけだぞ！、ウェーブ発射！』

やつの手から水の波紋が飛んでくるが……

バチィッ！

『ぬっ！？』

『あんだ達まとめて相手してやるわ！』

マゼンタの電撃が海王丸のウェーブを相殺した。

「ナイス、イセキ、マゼンタ！」

「もっと策敵効果を重ねて！、海に入られた場合にも攻撃が当たるように！」

確かに海に入られたらやつの機動力は更にかかる・・・。  
・・・よし！

「ロクシヨウ、回数なくなるまで策敵重ねろ！」

『了解！』

ブウウウウン・・・

『ぐうつ、猫ごときが私と部下をまとめて相手だとお・・・！、ナ  
めるナアアアアツ！！』

「・・・思った通り気付いてないわね。」

「アンテナ使用回数ゼロ、これ以上使用出来ません」

「よし！、準備完了！」

『行くぞ！、うおお！』

チャンバラソードを構え、海王丸に切りかかる！

『はっはっは！、また避けてやるわ！』

ガキーン！

『何!』

やはり当たる!、当てられるぜ!

『ぐ、くそああ、ならばアア、・・・海に逃げるだけだ。』

バシャンツ!

『ええい!邪魔よ!』

バチィツ!

『なんやてっ!』

その攻撃でカネハチは機能停止した。  
相手はメダロッチが無いから分かりづらいが。

「よし、マゼンタキャット!、あのシャチをぶっ潰しなさい!」

『OK、まかせといて!』

イセキのマゼンタが海王丸を追いかける。

「よし、ロクシヨウ、おまえもつづけ!」

『分かった!』

ロクシヨウとマゼンタのコンビで海王丸を追いかける。

『ぬおー、しつこい奴等だ!』

『もう逃げられんぞ!』

『覚悟するんだね!』

「やっちまえ、ロクシヨウ!」

「そのままぶっ潰してやりなさい!」

『ぢ、ぢぐじよオオオオオオ!』

ズドオン!

ロクシヨウとマゼンタの攻撃により海王丸は吹き飛んだ。

『おおおおっ!』

ぱしっ!

『回収、回収。』

「こ、コフィンバット!?!」

『お、おぼえてろおオオオオオツ!』

『くっ、逃げられたか。』

「……まあ、いいじゃない、みんなのところに戻りましょう。」

「まあ、そつだな・・・。」

オレたちは父さんたちのところに戻った。

海岸

「二人とも、遅かったな。」

「ああ、変なメダロットに絡まれた。」

本当はオレから話しかけたんだが・・・

「なんだ、イセキちゃんと青春してたんじゃないのか。」

「なっ!?!」

「ち、違います、コウさん!、誰がこいつなんかと!」

「こつちから願い下げだ!」

「「こいつなんか」だって、残念だったな、息子よ!」

「別に残念じゃねえ!」

『それよりそろそろ帰りましょう父上どの。』

「そつだな、ロクシヨウ、みんな帰ろうか。」

「それにしても本当仲がいいわね、あの二人。」

「そうかな？」

「……まあ、あなたには分かんないわよね。」

「なんだよ、それ……。」

『……ゴジムはどうすんの？』

こづいてみんなそれぞれの家に帰った。  
今日も平和な一日が過ぎたのだった。

?????side

『たっ、ただいま戻りましたあっ！』

『……。。』

ああ、やっぱり狐王丸は怒ってるな……。

『すみませんッ！作戦失敗しました！』

『やはり貴様に任せたのが間違いだった……。。』

「まあまあ、狐王丸、落ち着いて。」

このままだと狐王丸が海王丸を斬りかねないので僕は狐王丸を宥めた。

「……やはり次は私が！」

「狐王丸、君が出るのはまだ早いよ、君はこの組織の中でも特に重要な存在だ。」

「くっ、分かりました……。」

「それと海王丸、君の性格はよく知っているつもりだよ、だから今回のことも予想していたから……、気にする必要は無いよ。」

「あ、ありがとうございます……！」

「二人とも、もう下がっていいよ。」

「はっ……！」

「わかりましたあッ！」

「……僕もたまには息抜きしようかな。」

M  
e  
m  
o  
r  
y  
D  
i  
s  
c  
5  
^  
続  
く  
.  
.  
.  
.

Memory Disc 4 夏だ！、海だ！、シャチだ！？（後書き）

イセキ「いやー、今回はあだし目立ったわねえ。」

作者「おや・・・、後書きコーナーにまさか来るとは。」

かい「もしかしたら今回限りかもな。」

イセキ「なんですって!」

作者「まーまー、落ち着いて、出番はまだまだあるよちゃんと。」

イセキ「そう、嘘だったら許さないわよ、覚えときなさい。」

作者「・・・はい。」

かい「作者、次回予告的なものしなくていいのかよ?」

作者「ああ、そうだったね、今回は新キャラ登場!、以上!」

かい・イセキ「短!」「」

作者「じゃ、まあ、そうゆうことで次回もお楽しみに!」

では。

（ノシ）

Memory Disc 5 新しい出会い、そして友達・・・（前書き）

新キャラ登場です！

一応今回もロボットはあります。

でもメインは新キャラの方です。

若干短めかも・・・

Memory Disc 5 新しい出会い、そして友達……

町中

「……はあ。」

「へっ、へっ、へっ、てめえ竜崎のやつを倒したらしいじゃねえか。」

少し散歩に出掛けたらこうなるとは……。

『竜崎どのに勝ったのがそつとう影響しているな。』

「はあ、まあいい、相手してやるっぜ。」

「おっと、オレたち初心者だからよく、十対一でいいよなあ！」

「なっ、きたねえぞ！」

『くっ！』

「こいつを倒せば名が上がるぜ、シャあーッ！」

「くそ、とにかく向かえ打つぞ！」

『うむ、了解した！』

とオレたちが向かえ打とうとしたその時だった。

ジャラジャラジャラジャラ、ガシャアンッ!!

「なにい!?!」

攻撃の飛んできた方向を見るとそこには一人の少年とメガファントがいた。

「一人相手によつてたかつて、君たち恥ずかしくないのかい?」

「何者だてめえ!」

「君たちに名乗る名はないよ。」

少年は冷たい目で不良たちを見ていた。

「まだ九体残つてる、やつちまえ!」

「あ、あぶねえ!」

オレが助けに入ろうとした瞬間だった。

『ふはーはっはっはっはっ!?!』

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!

「なにい!」

ガンッ!

『ギニャー!』

ドゴッ!

『あべしっ!』

バゴオッ!

『うぼあっ!』

メガファントは一瞬で九体のメダロットを倒した。

「ぐ、使えねえメダロットだぜ!」

ピクッ

「使えないのは君の方だろ、メダロッターなのにまともに指示も出さないなんて……。」

少年は凍りつくような冷たい目で不良男を睨み付けた。

「ひっ、お、覚えてる!」

不良たちは捨て台詞を残し逃げていった。

「……。」

「あ、あのお……。」

「大丈夫だった?」

今度はオレに少年はとても穏やかで優しくそんな目を向けてそう言った。

「ああ、ありがとう。」

「いいよ、別に、僕はただ君たちを助けたかったただだから。」

「そ、そうか。」

オレが少年に礼を言つと、少年は謙遜した。

「なあ、ところで……。」

「なんだい？」

「そいつがおまえの相棒か？」

「いや、違うよ彼はたまたまそこを通りかかった野良メダロットさ。」

「えっ!？」

「ご苦労様、もう行ってもいいよ。」

『ああ。』

そう言つとメガファントは去って行った。

「……………」

「ねえ、君はどう思うっ？」

「え？」

オレばかんとしてると彼はそう言って来た。

「今の世界のことね。」

「え、ああ……………」

オレが返事をする少年はさらに話しを続けた。

「今の世の中メダロットを捨てる人間達や自然を破壊したり同じ人間同士で傷つけあう人達もいる、君は今のこんな世界をどう思う。」

話し終わると少年は再びオレに聞いてきた。

「オレには何か難しいな……………」

「そうだね、まだ君には難しいかもね、でも僕はこんな世界は一度壊して造り変えた方がいいんじゃないかと思う。」

「……………！」

「ふふ、冗談だよ。」

「な、なんだよ、おどかすなよ……………」

少年は冗談だと言ったがオレにはそうは思えなかった。だってとても悲しそうで消えてしまいそうな表情をしていたから。。。

「ねえ、君たちの名前は？」

「え、オレは獅童かい、それでこいつはロクシヨウだけど。。。」

「そうか。。。、ふふ。」

少年は再び穏やかな笑顔でオレたちを見つめた。

「な、なあ、おまえの名前は？」

「え、僕？」

「ああ、おまえの名前。」

「。。。黒木 乃亜。」

「そうか、よろしくな、乃亜！」

「。。。うん。」

オレたちはしばらく話をしながら二人で歩いていた。

「なあ、ところでおまえ家族とか友達は。。。？」

「。。。家族は父さんだけ、後はみんな僕が小さい頃に事故で死んじゃった。。。。」

「う、うめん！」

「いいよ、僕にはメダロットの友達がたくさんいるんだ、人間の友達は少ないけど……。」

少年は少し悲しそうな表情をした。

……だったら。

「オレがいるじゃないか。」

「え？」

「おまえに人間の友達がいないってんなら、オレがもっているだろ？」

「……ありがとう、かいくん。」

「いいよ、オレがただおまえと友達になりたかったただけだ。」

「うん。」

「なあ、公園で少し休もうぜ。」

「そうだね。」

オレたちは公園のベンチまで行き、座った。

「なあ、おまえの相棒ってどんなやつだ。」

「僕の・・・？、僕の友達はすごく強いよ、小さいころから一緒だった、でもすごく無口なんだ。」

「そうなのか？」

「でも僕には彼の考えていることは分かる、僕はメダロットたちと心」で話しているから。」

「・・・へえ、なんだかオレおまえとロボトルしたくなってきたな。」

「ふふ、でも今は彼をつれてきてないんだ。」

「なんだ・・・。」

「でも僕とロボトルはできるよ。」

「え、本当か？」

「ちょっと待っていて。」

そう言うと乃亜は近くにいたメダロットに話しかけた。

「・・・。」

しばらくすると乃亜が戻ってきてオレにこう言った。

「おまたせ、彼が僕と一緒に戦ってくれたことになったよ。」

『よろしく。』

一緒に戻ってきたメダロットはキン・タローだった。

「よし、じゃあ初めようぜ。」

「うん。」

「ロボトルファイト!」

オレたちの掛け声と共にロボトルが始まる。

「ロクシヨウ、まずはチャンバラソードだ!」

『いつも通りでござるな!』

キン・タローにロクシヨウは突っ込んで行く。

「いけえー!」

『あたらないうー!』

ヒョイツ!

『なに!?!』

「そのままボディプレス!」

『でえーい!』

ズドオ!

『ぐあつ!』

「左腕に40ダメージ、左腕パーツ破損」

「よけてすぐに攻撃!?、すごい反応速度だ……。」

オレは改めてあいつがすごいやつだと認識した。

「まだいけるか、ロクシヨウ?」

『ああ。』

「よし、ならアンテナを……」

「遅いよ!」

ロクシヨウがアンテナを使用しようとした時だった。

『なっ!?!』

キン・タローはすでにロクシヨウの前にいた。

「ライトアクスだ!」

『でやあ!』

ガキインツ!

『ぐおっ!』

「右腕パーツに20のダメージ」

「くっ、まだまだ！」

「いや、終わりだよ。」

『グレイーートアクスー！』

ガゴオオンッ！

「右腕に20のダメージ、右腕パーツ破損、頭部に40のダメージ、頭部パーツ破損、ロクシヨウ機能停止」

「ロクシヨウ！」

オレは急いでロクシヨウをメダロツチに戻した。

「大丈夫か、ロクシヨウ!？」

『ああ、乃亜どのは彼の實力を完全に引き出していた。』

「ああ、そうだな、オレたちの完敗だ……。」

オレは乃亜の方を向き握手を求めた。

「いいロボットだったぜ。」

「うん……。」

乃亜は爽やかな顔で握手に応じた。

「今日は楽しかったぜ、おまえに会えてよかった。」

「僕もだよ。」

「またな。」

「うん、また。」

こうしてオレとロクシヨウは家に帰った。

かいの家

「ただいまー！」

「おかえり、かい、・・・あらやけにうれしそうねえ？」

「ああ、新しい友達ができたんだ。」

「そう、はなしのつづきはごはんをたぐながらにしましょう。」

「うんー！」

こうして今日もオレの平和な一日は過ぎていった。

??.?.?side

「いま戻ったよ。」

『お帰りなさいませ、……おや、やけにつれしそつですね。』

「うん、ちょっといい事があったんだ。」

『はあ……?』

「ところで計画の方は?」

『はっ、パーツの復元は進んでおります。』

「そつ、足りないものは?」

『恐らく今のままではパーツ自体がパワーに耐えられず壊れていくかと……。』

「そつ、装甲技術の向上が必要なのか……。」

「ロボロボ団がやったようにあがたヒカルのメタビーからデータを手に入れたらどうだ。」

突然話に入ってきたのは父さんだった。

「父さん……。」

「……おまえの働きに期待しているぞ。」

そう言うと父さんは去って行った。

『……あの方の考えている事は今一理解できん。』

「大丈夫だよ、狐王丸、父さんは僕や君たちの味方だ、僕らを裏切る事は絶対ない。」

『はっ、失礼しました。』

……あがたヒカルのメタビーか。

「空王丸。」

「はい、分かりました。」

まずは彼の實力を知らなければね……。

「……いざとなれば僕自ら出る。」

僕たちの計画は順調だ、見ていて父さん、僕らの理想の世界はすぐだよ……。

M  
e  
m  
o  
r  
y  
D  
i  
s  
c  
6  
∧  
続  
く  
.  
.  
.

Memory Disk 6 炎上の死闘（前書き）

遅くなりました！

マジでスイマセン！

反省してます！

今回は結構、内容は充実してると思うので楽しんでください！

Memory Disk 6 炎上の死闘

学校

「・・・かいくん、実はオレ、誰かにつけられている気がするんだ。」

「・・・は？」

ヒカルがオレに突然そんなことを相談してきた。

「・・・ファンか何かじゃないのか？」

「いや、違うんだ、何か空から見られてるみたいで、多分メダロツトなんだ。」

「・・・」

(この前は海で出たんだよな・・・、狐が陸だとしたらもしかして・・・)

「まあ、用心するに越したことは無いな、下校中はお前の上空を見張つといてやる、・・・もしかしたら気のせいかも知れないけどな。」

「ありがとう、かいくん・・・。」

「気にするな、友達だしな・・・。」

「かいくん……。」

そして放課後……

「上か……。」

空だけでなく、上の物陰にも注意した方がいいか……

「ロクシヨウもアンテナで索敵頼む。」

『分かった。』

オレとロクシヨウはしばらくヒカルの上の方に注意しながら歩いていた。

「どうだ、ロクシヨウ。」

『いや……』

と、オレ達が話していると……

『ピッ！』

『……』

「反応があつたのか!?!」

『ああ、あの木の陰で……』

「ヒカル！、その木の上だ、メタビーを転送して撃ち落とせ！」

「えっ、あ、うん！、メタビー、転送！」

チュインチュイン！

『やっとオレの出番って訳か！、行くぜ！』

ズドドドッ！

メタビーは木の陰にいるものをサブマシンガンで撃った。

『な、何！？、何故バレた！？』

「へっ、ロクシヨウのアンテナを使えばめえを見つかるなんざ楽勝だ！」

しかし、飛行型ってことはまさか・・・

『く、バレてしまったら仕様がな、我が名は空王丸！』

「やっぱりそうか！、なら手加減は出来ないぜ！」

オレはやつの名を聞いてあいつらの仲間だと核心した。

『こい、我が精鋭達！』

すると空王丸はヘルフェニックスを二体呼び出した。

「ヘルフェニックス二体とデスフェニックス一体か・・・、いくぞ、

ロクシヨウ!」

『ああ!』

「メタビー、オレ達もやるぞ!」

『おう、まかせな!』

メタビーとロクシヨウは空王丸達に向かって走る。

『おまえと一緒に戦つのも久し振りだぜ。』

キインツ!

『ああ、国際ロボット選手権以来か。』

ゴオオ!

ズドドツ!

ガンツ!

『オレの足を引つ張るんじゃないぞ。』

『・・・心得た!』

するとロクシヨウはヘルフェニックス二体にターゲットを絞り、メタビーはデスフェニックスにターゲットを絞った。

『くっ、さっきからよそ見などしおって!』

『へっ、安心しろ！、今からおまえの相手をしてやる！』

『二対一とは、おまえなめているのか！』

『ふ……、貴様らなど拙者一人で十分。』

「ロクシヨウ、そいつらをメタビーの所に行かせるなよ！」

『ああ！』

そしてメタビーの方は……

『いくぜ！』

「メタビー、リボルバーだ！」

ドオンツ！

『ふん！』

『ちっ、ちょこまか動くんじゃないやねえ！』

「おい、おまえはなんでオレをつけていたんだ！？」

『ふん、正確には貴様ではなく、メタビーに用があるのだが。』

『何！？』

「何の目的があつて……」

『それを教えると思うか!?!』

『力づくで聞き出せってか!』

ガンッ!、ガンッ!

『くっ、』

『オラオラオラア!?!』

ズドドドッ!

『ぬっっ、調子に乗るなよ!、ファイアライフル!?!』

ゴオオッ!

『うおっ!?!』

「脚部に8のダメージ」

『へっ、このくらい・・・、ぐっ!?!』

『ふん、バカめ!』

「どうした、メタビー!?!」

『あ、足が焼けるように熱い・・・!』

『当然だ、私のファイアライフルを食らったのだからな、それは時間と共に貴様の足を蝕んでいくぞ!』

『くっそお・・・!!』

「くっ、メタビー!!、反応弾で攻撃だ!」

『お、おう、ミサイル発射!』

ズドオツ!

ミサイルは空王丸を狙い、追いかける。

『ふん、その程度・・・』

ミサイルを避ける空王丸、しかし・・・

ズドオツ!!

『何っ!、ぐああああ!!』

ミサイルの爆風が空王丸を襲った。

『やっと、落ちてきたか・・・!!』

『お、おのれえ!!、フレイルライフル!!』

ゴオオツ!

『当たってたまるかよ!!』

メタビーはファイヤー攻撃を避け、反撃にでる。

『食らいやがね!』

ズドドドッ!

メタビーはサブマシンガンで空王丸を撃つ。

『くっ……、ブラスト……』

『やらせるか!』

ガンッ!

空王丸が頭部パーツを使用しようとしたのでメタビーはリボルバーで阻止する。

『ぐあっ!』

『オラオラ、オラアッ!』

メタビーは拳で空王丸を殴り付ける。

ガンガンッ、ガンッ!

『ぐうっ!』

『まだまだあ!』

ガンッ、ガンッ!

『ぐっ、ちくしょお……調子に乗りやがって……!、お、私は

空の支配者、空王丸様だぞ・・・！、こ、こんなことがあってたまるかあ！』

すると空王丸は大量の炎を撒き散らす。

ゴオオオオオオツ！！！！

『はーはっはっは、全部、全部燃えてしまえ！』

「なっ！？」

『まずい、炎が燃え広がったら・・・！、どけっ！』

ザンツ！

『ぐぎぎやあー！』

ロクシヨウは今まで相手にしていた空王丸の部下を一瞬で切り裂き炎を消しに行く。

『くそっ、オレもこいつを相手にしてる場合じゃねえ・・・！』

メタビーも炎を消しに行こうとするが・・・

『はは！、させるかあー！』

ゴオオツ！

『うわっ！』

空王丸がメタビーの行く手を遮る。

『オレはおまえを相手にしてる場合じゃないんだよ!』

『知るか!、全部燃えてしまえばいい!』

「メタビー、火を消すにはまずそいつを倒すのが先決だ!」

『くっ……、ああ!』

メタビーは再び空王丸と戦いを始める。

そしてロクシヨウたちは……

『くっ……、一人では間に合わん……!』

「くそっ!消してもきりがない!」

燃え広がる炎を消すのにてこずっていた。

「くそ……、せめてもっと人手があれば……」

乃亜 side

「……まさかこんな事になってるなんて。」

まずいな……このままじゃ……」

「セレクト隊を呼んでおくか・・・」

乃亜はケータイを取りだしセレクト隊に連絡した。

「・・・よし、あとはかいくんの友達に知らせに行こう。」

僕は炎を消すための人手を集めるため、かいくんの友達を呼びに行った。

公園

恐らくはこの辺りに・・・、・・・やっぱりいた。

かいくんとよく一緒にいる女の子と・・・、よく知らない男の子達だな。

「ねえ、君たち。」

僕は彼らに声をかけた。

「・・・ん？、誰よあんた？」

「オレらが誰だか知ってるのか!？」

「オレたち・・・強い・・・」

「話を聞いてくれるかな？」

「・・・何よ？」

僕がそう言つと彼女は僕に警戒の目を向けながら聞き返した。

気が強いんだな……。

「実はかいくんの事だね……」

「かい……？、……何か……あつたの？」

「かいつて誰だつたけ？」

「……さあ……？」

僕が彼女と話していると彼らが話の間に入ってきた。  
すると……

「……ちょっと黙つててくれる？」

「わ、わりい。」

「ごめん……。」

彼女は彼らを鋭い目付きで睨み付けた。

「……話を続けて。」

「……今、彼の身に危険が迫つてる、助けてほしい。」

「……！、場所は！？」

「うん、場所は……」

僕は彼女にかいくんの場所を教えた。

「……行くわよ、あんたたち！」

「な、なんなんだよ！」

「……イセキ……いつもと違う……。」

彼女はかいくんの所へと急いで向かった。

「よし、つぎは……。」

メダロット研究所

「博士、あのメダロット達の事です……。」

研究所の二階に入ったらそこには金髪の男性と博士と思われる人と  
緑髪の男性がいた。

「あの、すみません。」

「ん、君は……?」

「乃亜って言います、実は……。」

僕は彼らに今あっている事を伝えた。

「・・・ふむ、そんな事が。」

「博士、すぐに向かいます。」

「までジツク、その少年は信じられるのか？」

「竜崎、今はそんな事を言っている場合じゃない、かいくん達の命が危ないかも知れないんだ。」

「・・・わかった、オレも行く。」

「よし、僕も急がないと・・・。」

こうして僕もかいくんの所に向かった。

かい side

「人手があれば・・・。」

オレがそう思った時だった。

「かい！」

「イセキ!？」

「あなたまたこんな危ない事に首突っ込んでたの?、少しはあたしの事も頼りなさい!」

「こりや大変な事になってんな、いくぜシアンドッグ！」

『はい！』

「イエロータートル・・・」

『はい。』

そしてさらに・・・

「大丈夫か、かい君！」

「無茶しやがって。」

「ジツクさん、竜崎さん！？」

「炎の事は僕達に任せるんだ、サーチラット！」

「消すぞ、アタックティラノ！」

「ジツクさん、やっぱりオレも・・・」

「かい君、君はヒカル君達の加勢に行くんだ。」

するとさらに別の声がオレにそう呼び掛けた。

「正義さん！？」

「なっ、兄貴！？」

「……、さあ行くんだ、かい君！」

「……はい！、行くぞロクシヨウ！」

『ああ！』

オレたちはヒカルの加勢をするため、空王丸の所へ向かった！

『ぬう、なんだ奴等は、そろそろとうつとおしい。』

「加勢に来たぞ、ヒカル！」

「かいくん！？」

「一気にけりをつけるぜ！」

「うん！」

『いくぞー！』

ザンツ！

ロクシヨウは素早くチャンバラソードで切り裂く！

そこにさらにメタビーが追撃する！

『つおらあああっ！ー！』

ガガガガガッ！、ズドドドッ、ドンッ！ドンッ！、ズドオッ！！



空王丸はコフィンバット捕まれ回収されていった。

「なんだったんだ、あいついきなり怯えだして……」

「かい君！、火の方も消し終わったぞ……ぐふっ、ゴホッ、ゴホッ！」

「正義さん！？」

正義さんはオレに火を消し終わった事を伝えた後、急に咳き込んだ。

「ちっ、体が弱いのに無理するからだ！」

「隊長！」

「隊長の体長が……」

「シャレを言っている場合じゃ無いであります！」

「……大丈夫か、兄貴？」

「……ああ、もう大丈夫。」

心配する竜崎さんに正義さんはそう言った。

「引き上げるぞ、おまえたち！」

「はいであります！、隊長！」

そう言うと正義さん達セレクト隊は引き上げた。

「あの人が今のセレクト隊の隊長なの？」

「ああ、いい人なんだ。」

「はっ、どうだかな、あのセレクト隊だぜ。」

「ヤンマ、てめえ……」

しかしオレが怒る前に怒った人物がいた。

ガッ！

「……おい、小僧、言葉には気を付けろ。」

「な、何すんだよ!」

竜崎さんはヤンマの胸ぐらを掴み、恐ろしい表情で睨み付けていた。

「やめろ、竜崎!」

「……」

バツ!

竜崎さんはジックさんに言われヤンマを離れた。

「竜崎、おまえは兄の事になるとすぐにそうなる、相手は子供だ!」

「……すまない。」

「ヤンマ、おまえも言い過ぎだ。」

「……悪かったよ。」

「……みんな、ここまでの騒ぎがあったのに大惨事にならなかったのはみんなの協力があったからだ、僕が代表して礼を言うよ。」

「……ジツク、俺たちも帰るぞ。」

「ああ、そうだな、それじゃあみんな、本当にありがとう。」

そう言ってジツクさんと竜崎さんは帰って行った。

「クボタ、俺たちも帰るぜ。」

「……」

そしてヤンマとクボタも帰り……

「じゃあオレたちも帰るよ、またねかいくん。」

『オレに挑戦したいって言うならいつでも受けてたつぜー!』

そしてヒカルとメタビーも帰り残ったのはイセキと乃亜、そしてオレだった。

「……あんた名前は?」

「乃亜、黒木乃亜だよ。」

「……あなたたちどうい関係なの？」

「僕とかいくんは友達だよ。」

「……そう、じゃあ、ほら。」

イセキは乃亜に手を差し出した。

「……何？」

「握手よ、かいの友達ならあたしの友達、いいでしょ。」

「……うん！」

イセキと乃亜は握手をかわした。

「じゃあ、オレたちも帰るか！」

「うん、またね、かいくん、イセキさん。」

「じゃあね、乃亜くん、かい！」

「おう、またな！、行くぜロクシヨウ！」

『ああ、母上どのが待っている！』

こうしてオレたちはそれぞれの家に帰った。

M  
e  
m  
o  
r  
y  
D  
i  
s  
c  
7  
^  
続  
く  
.  
.  
.

Memory Disk 6 炎上の死闘（後書き）

かい「おい作者、こんな長い期間どこで油売ってた。」

作者「スイマセン、ピックアップであなた方の次の世代のキャラクターやオリジナル小説、Double Wind のイラストを上げていて……」

かい「ああっ！？、DWはともかくメダロットZの奴等は上げる必要ねえだろ、まだ！」

作者「……スイマセン。」

かい「……とにかくメダロットZに繋ぐためにはオレたちの物語が完結しなきゃならない、だからよ……、諦めずに頑張れ、どんなに遅くなっても投稿するんだ、応援してくれる人たちを裏切っちゃいけない。」

作者「……ああ、がんばるよ、かいくん！」

かい「じゃあ、予告いつとくか！」

作者「はい！次回から大会編です、まずは町内大会！みんなの本気が見れるかも！」

かい「次回も見てくださいよな！」

Memory Disc7 町内大会の幕開け(前書き)

久々の更新!

一挙二話投稿です!

どうぞお楽しみに!!

Memory Disc 7 町内大会の幕開け

なんだ・・・また夢か

「ヨ・・・ク、金色のカブトムシって？」

『あなたのお祖父さんが研究なされているカブトムシです。』

・・・ヨ・・・ク？

なんだろう、今オレの凄く近くにいるような・・・

「金色のカブトムシかあ・・・オレも見てみたいなあ。」

『見れますよ、必ず。』

「でも、白いクワガタムシにならもう会ったかな。」

『ふふ・・・、冗談が御上手になられましたな。』

ヨ・・・ク？、なんだろう・・・思い出せそうな気が・・・

『さあ、そろそろ博士の所に戻らねば、きっと心配なされてるはずです』

「うん！」

待ってくれ・・・！、まだ思い出せて無いんだ！

「はっ!?!」

夢から目が覚めるとオレは自分の部屋の布団の上にいる。

「……何だったんだ、あの夢は？」

ガチャツ!

オレがそんな事を考えていると部屋に誰かが入って来た。

『かいどの、ポストにこんな物が。』

「ん……何だ?、チラシ?」

本日、神社にて町内子供ロボット大会を開催致します。  
参加者の方は午前10時までには神社へお集まりください。

「町内大会か……」

『参加するでござるか?』

「勿論!」

オレ達は急いで神社に向かう事にしたが……

「まちなさい!」

「か、母さん!?!」

「あそこははんちゃんとなべなきやだめでしょ!」

「……はい。」

母さんに引き止められ、朝食を食べてから行く事になった。

「それじゃ、行ってきます！」

朝食を食べ終わったオレは急いで神社に向かった。

「・・・あんな嬉しそうなはいは久しぶりに見たわ。」

- 神社 -

「よし、何とか間に合ったな！」

回りを見渡すと同じクラスの奴等も来ていた。

「遅かったね、かいくん。」

「ああ、少し足止め食らってな・・・」 『やはりヒカルどのも出られるのか？』

「ああ、もちろん！」

『出来ればお前とはもう戦いたくなかったんだけどな・・・』

「？、やけに弱気だなメタビーの奴・・・」

「あはは・・・実は前にロボロボ団に操られたロクシヨウと戦った事があつて・・・さすがのメタビーも戦いたくないって思うくらい強かったから・・・」

『あのような奴等に操られるとは・・・不覚だった。』

『ま、まあやるからにはまたオレが勝つけどな！』

「ああ、今度は実力勝負だぜ、メタビー、ヒカル！」

「ああ、かいくん達とのロボトル、楽しみにしてるよ！」

「熱くなっているところ悪いけど大会に参加するのはあんた達だけじゃないのよ？」

「イセキ!？」

「その通りだよ、僕だって出てるんだよ?ヒカル。」

「ユウキ!」

オレとヒカルが話しているとイセキとユウキって言う奴が話に割って入って来た。

「ヒカル、ユウキってたしか・・・」

「ああ、二毛作ユウキ、メダロット社の社長の息子でロボトルの腕も高いオレのライバ・・・ルだよ。」

「なんか間空かなかったか?」

「かいだったね、キミだけ僕のメダロットを知らないのは不公平だからね、見せてあげるよ、来い!ロールスター!!!」

チユインチユイン!

『どうだい?私のこの流線形のボディは美しいだろう?』

「マスターもメダロットもそろってキザな感じだな・・・」

「悪い奴じゃないんだけどね・・・」

『そう言えばキララどのは・・・』

「来てたはずだけど・・・」

『あいつらだつて参加してるんだ、心配しなくても大丈夫さ!』

「いやメタビー、オレはある意味別の意味で心配なんだけど・・・」

「どうした、ヒカル?」

「な、なんでもないよ!」

『かいどの、世の中には知らない方が良くともあるのでじぎる・・・』

『だな・・・』

「・・・?」

メタビーとロクシヨウは何かに納得したような表情をしていたがオレはよく意味がわからなかった。

「みなさんお待ちせいたしました！、これより町内子供ロボット大会を開催したいと思います！」

オレ達が話していると町内大会の開始の合図がされた。

「今回の大会レフェリーを勤めますのはこの私、ロボット協会公認レフェリー、Mr.うるちです！」

「うるちさんだ。」

「大体こういう大会の時はうるちさんがレフェリーをしているんだ。」

「

「・・・他の所でロボットがある時とかはどうしてるんだろ？」

「・・・確かに気になるね、もしかして他のレフェリーがしてるんじゃないかな？」

「でもうるちさんはオレ達の所に都合よく来るよな・・・？」

「・・・確かに。」

「では今回の大会ルールを説明します！」

「おっと、静かにしないとな。」

オレ達はしゃべるのをやめうるちさんの話を聞く。

「まず一度に使用できるメダロットは一体のみ、試合ごとにパーツの変更は認められています！」

「オレ、ロクシヨウのパーツしか持って無いぞ・・・」

「ええっ！？、かいくんまさか公式ロボット一回もしたことないの

!?

「いや、一回だけあるんだけど……あの時はお互いパーツの取引はしなかったから……」

「そうなんだ……空いてる時間にコンビニにでも行ってみたら?」

「ああ、考えとく……」

「では、ルールを守って存分にロボトルを楽しみましょう!、まずは第一試合、ヤンマ選手対イセキ選手!」

「げっ、いきなりイセキとかよ!」

「運が無かったわね、ヤンマ!」

『こりやイセキ達の勝ちだな……』

「かいくん、今のうちにコンビニに行ってきたら?」

「ああ。」

オレは急いでコンビニへと走った。

「さーてヤンマ、覚悟しなさい!」

「くっそー!、やるだけやってやるぜ!、いくぞシアンドッグ!」

『は、はい!』

・コンビニ・

「うーん、なるべくロクシヨウと相性の良さそうなパーツが良いんだけど……」

「かいくん。」

「うわあっ!?!?」

オレがパーツを眺めていると後ろから誰かに声をかけられた。

「の、乃亜！？、脅かすなよ・・・」

「ごめんごめん、そんなつもりじゃ無かったんだけどなあ・・・」

「で、何の用だよ？」

「町内大会に出てるんでしょ？」

「えっ、知ってるのか？、もしかしてお前も・・・」

「いや、僕は違うよ、この町の人間じゃ無いからね。」

「そうか・・・」

オレは乃亜のメダロットが見れると思ったので残念だった。

「・・・でもキミがこの大会で勝ち抜く事が出来たらボクと戦えるかもしれないよ？」

「えっ？」

「ふふ、これはボクからのプレゼントだよ、もし必要になったら開けて見て。」

「あ、ああ・・・」

オレは乃亜からパーツの箱と思われる物を受け取った。

「じゃあ、またねかいくん・・・」

「おう・・・」

「勝者、イセキ選手！」

「遅かったか！」

「かいくん、遅かったね？」

「ああ、ちよつとな・・・試合は？」

『見ての通りイセキの勝ちだぜ。』

「・・・ああ、それはわかる。」

「では第二試合、コマチ選手対ボウズくん選手！」

「コマチ？」

「・・・やっぱり。」

「おい、オレの相手はどこだ!？」

「あはははは！咲かせましょうお米の花、散らしましょう悪の花、天から舞い降りた美少女メダロットーコマチ、ただいま参上！」

「あれ・・・」

「なにも言わないで・・・」

オレは空気を読んでそれ以上にも言わなかった。

「ふざけやがって!、いくぜ、ア・ゲダマー！」

「行きなさい!、スチール！」

『蒼き戦乙女！スチール見参!』

「なんだあのメダロット？」

キラ・・・コマチが出したメダロットは見慣れないタイプだったの

でオレは気になってヒカルに聞いて見た。

「確か別の会社の製品だったと思うけど・・・」  
「ヴアルキリー型のケンプメイドだね、右腕の停止攻撃と左腕の盾、そして新しい機能を秘めた頭部・・・他の社の製品だけど中々の性能だよ。」

「ユウキか・・・詳しいんだな。」

「このくらい当然さ。」

「そうよ、ユウキちゃんにとっては当然の事なのよ！」

「・・・誰？」

「僕のマイ・ハニーさ。」

「パディよ、よろしくね、かいちゃん。」

「ちゃん・・・？」

「パディは誰に対してもちゃん付けで呼ぶからなあ・・・」

「と言う事はヒカルもか・・・」

「それよりも試合を見ないと！」

オレ達がステージに目を向けると・・・

「ああつ、ア・ゲダマー!!!」

「ア・ゲダマー機能停止、勝者コマチ選手！」

「お、終わった・・・？」

オレ達が振り向くと試合はすでに終わっていた。

「たいしたこと無かったわね、行くわよスチール！」

「では第三試合、かい選手対パディ選手！」

「よっしゃ、オレの番か！」

「かいくん気を付けて、パディは手強いよ。」

「ああ、油断はしないさ！」

オレはヒカルにそう言うのとステージの上上がる。

「私の相手はかいちゃんなのね、手加減はしませんわよ。」

「上等！、いくぜロクシヨウ！」

『おう！』

「いきなさい！ベティ！」

パディが出して来たメダロットはベティベアだった。

「重力系の射撃型か・・・」 『まずはいつも通り・・・』

「ああ、先手必勝だ！」

ロクシヨウはチャンバラソードを構え突っ込む。

「ベティ、迎え撃ちなさい！」

ベティは重力弾を発車してくる。

『ふっ、そんな攻撃、拙者には当たらん！』

ロクシヨウはベティの攻撃を素早くかわす。

「そんな鈍い玉、単純に撃つても当たるかよ！」

「失礼ね！私がそんな事も考えてないとも思っていますの！」

「なに！？」

ドンッドンッドンッ!

『ぐあっ!?!?』

「ロクシヨウ!」

避けた先には動きを読んでいたのか、重力弾が発射されていた。

「右腕に10のダメージ」

「くっ、動きを読んでロクシヨウが避けた先にも発射していたのか・  
・、重力弾の鈍い動きに気をとられて気づかなかった・・、」  
「いいわよ、ベティ。」

今のは油断したぜ・・、油断しないって言ったのにな・・、よし  
気を入れ直していけ!

「すまないロクシヨウ、油断した!」

『拙者もだ、かいどの!思っていたよりずっと手強い。』

あの重力弾を攻略しないとな・・、熱くなつて来たぜ!

Memory Disc 8へ続く・・、

Memory Disc 8 激闘！町内大会！（I）

あの重力弾を攻略しないとな・・・オレはベティベアの重力弾を攻略する方法を考えていた。

『くっ、あれを対処しなければ自由には動けぬ・・・』

「殺りなさいベティ！」

ブウウ・・・

ドウンッ！

「いま殺るって言わなかったか！？」

「まだまだまだあ！」

ブウウウウウ・・・

ドドドドドドドウンッ！！

『なっ！？』

「そんなに連射するかつ！？」

大量に撃ち出される重力弾を避けるロクシヨウ、だが・・・

ズドドドッ！

『ぐああっ！』

避けた先にも重力弾があり、結局当たってしまった。

「左腕に20のダメージ、脚部に10のダメージ」

『くっ、どうすれば・・・？』

「ロクシヨウは格闘タイプ、近づかなきゃ攻撃出来ない・・・！」

「一体どうすれば・・・考えろ、考えるんだ・・・！」

「ほらほら！どうしたの！かいちゃん、もう降参！？」

『くっ、まるで誘導されてるようだ・・・』

・ステージ外・

「かいくん、やっぱり苦戦してる・・・」

『ロクシヨウの野郎！、いきなり負けるなんて許さねえぞ！』

「かいのやつ、純粋な射撃タイプと戦うの初めてだからね・・・」

「かいくん、がんばれ・・・！」

・ステージ・

誘導されてる・・・？

「まさか・・・重力弾は全て計算されて撃たれてるのか？」

『ぐあっ！』

「ロクシヨウ！」

「左腕に20のダメージ、左腕パーツ、破損」

「大丈夫かロクシヨウ!？」

『ああ、かいどのは考えをまとめてくれ。』

計算・・・誘導・・・

「そうか!、わかったぞ！」

「やりなさい!ベテイ！」

ブウウウウウ・・・

ズドドドドドウツ!!

「上だ!ロクシヨウ!!」

『うおおっ!!』

ロクシヨウはオレの指事で空高く飛び上がる。

『!?!?』

「べ、べテイ！」

「そのまま突っ込め！」

『うおおおおおっ!!』

「なにやってるのベテイ!!」

『!?!?!?!?!』

ザンツ！！！

「頭部に20ダメージ、ベティベア機能停止」

ピンツ！

ベティの背中からメダルが飛び出る。

「そこまで！、勝者かい選手！」

「わ、私が負けるなんて……！」

「よっしゃああー！！！」

『やったでござるな、かいどの。』

「あ、あなた達なんて……ユウキちゃんにこてんぱんにのされちやいなさい！」

パディはそう言ってステージを降りて言った。

「……なんか喜ぶ気が失せた。」

『気にしない方がいいでござる……』

「かいさん達も早く降りてください。」

「すみません、うるちさん！」

『ん……』

ビツッ、ビツッ！

『……』

ボンツ！！

「ロクシヨウ!?」

ステージから降りた瞬間ロクシヨウの右腕パーツが吹き飛んだ!

『くっ……どうやら最初の重力弾の当たり所が悪かったらしい……』

「くっ……これじゃスラフシステムでも無理だな……、修理してる時間もないし……」

「かい、どうしたの?」

オレがしばらく悩んでいるとイセキが話しかけて来た。

「実は……」

……

「成る程ね……ちよつと見せて見なさいよ。」

「ああ……」

オレはイセキにロクシヨウの右腕を見せる。

「……このくらいだったらあたし直せないこともないけど。」

「本当か!?!」

「でも次のあなたの試合には間に合わないと思うわ、一応修理はしてみるけど……」

「道具とかは大丈夫か?」

「あてはあるから大丈夫よ。」

「それにしてもすごいなお前、オレと年もかわらねえのにそんな事出来るなんて。」

「ま、まあ将来そういう関係の仕事に就きたいと思ってるから、親戚のお兄さんに習ってるだけよ……」

「そうか。」

「ほ、ほら、あんたは試合でも見てなさいよ！あたしは忙しいんだから！」

そう言っつてイセキは去って行った。

「……将来か。」

『かいどの？』

「次は第四試合！、ユウキ選手対八カセ選手！」

「ふっ、一瞬で終わらせるよ。」

「ズバリ、僕の勝利は間違いありません！」

そして……………

ガシャンッ！

「ドクタースタディ機能停止！」

「そ、そんな〜！」

「ふっ、僕らの勝ちだね。」

「やっぱりユウキの勝ちだ。」

『だろーな。』

「次は第五試合、クボタ選手対タツノスケ選手！」

「……………」

「へっへっへ、アイツからもらったパーツを試すか……」

「まあ、クボタならそのへんのやつには負けなйдろ。」

『ああ、そうだな。』

「ロボットファイト！」

そして相手の方が転送したメダロットにオレ達は驚く。

「ムーンドラゴン？」

「確かにムーンドラゴンだがあいつのつけてるパーツ、見たこと無いぞ!？」

ムーンドラゴンの両腕はそれぞれ赤と緑の物になっていた。クボタは警戒しながら仕掛ける。

「……バッテリー！」

『はいいつ!』

「おー動くね動くねえ!、ムーンドラゴン!、キャノンシエル!」

『おう!』

「…………くる?」

『むむっ!?!』

ガチャン!

「……<sup>トランプ</sup>罫?」

『だったら早期決着をつけるまで!ノーマルレーザー!』

ピーーーーッ!!

『おっと!』

「ヒュウツ!早い早い!」

「……罫、反応しない?」

『一体なにが……?』

「……何なんだあの罫。」

「格闘トランプなのか……?」

「だったら設置する訳が無い。」

「……だよね。」

何なんだ一体……気を付けろ、クボタ……

「……ハイパーレーザー!」

『はいいつ!』

ピーーーーーーーーッ!!

『ほいつと!』

「いまだ、ムーンドラゴン! シューター発射!

『連鎖攻撃!、クロス・・・』

「ファイヤあぁー! ! ! ! !」

「・・・! 避ける、イエロータートル!

『!、はいつ!』

ズドオオオオンツ!!

「な、なんだよ・・・あの威力・・・」

「嘘だろ・・・?」

『なんて威力だ・・・!』

『一体どんな仕組みだ・・・?』

「イエロータートルは・・・! ! ?」

『・・・ふう、危なかつたなあ。』

「・・・すごいパワーだ。」

『おいらのレーザーよりすごいな・・・』

「キャノンシエル!」

『セット、オン!』

『・・・?、また・・・?』

「……何の意味が？」

「シューター……」

カチャツ……

『！？、またあれを撃つ気が……』

「なんちゃって。」

「……！？」

『おらあつ！！』

バキィッ！

『ぐっ……』

「直接殴った……！？」

「ムードドラゴン、りゅうすいしよつー！ー！」

『次は外さないぜ！』

ムムムム……

「……策敵！？」

『させるか！、ハイパーレーザー！』

ビーーーーーッ……！

『当たらねえ!』

「……!」

「てめえらみたいなノロマには一回で十分か!」

「なんだと……!」

『吹き飛びな!』

「目標、ロツクオン、連鎖攻撃!クロスファイヤー!」

「避け……」

『間に合わな……』

ズドオオオオオオツ!!!

「頭部、右腕、左腕、破損、イエローターゲットル機能停止」

「……そんな。」

「まあこんなもんさ……」

「しょ、勝者、タツノスケ選手……」

試合は思わぬ方向に進んだ。クボタが負け、タツノスケと言う男が勝ったのだった。

「く、クボタ！」

オレ達は急いでクボタの元に駆け寄った。

「大丈夫か、クボタ！」

「・・・うん。」

『あのパーツ、すごい威力でござる・・・イエローどのを一撃で倒すとは。』

「はっ、そんな亀しとめられない方がおかしいぜ。」

「なんだと!？」

「そういやさっきの犬も猫使いのお嬢ちゃんにこてんぱんにやられてたようだが、オレなら瞬殺だぜ・・・!」

「てめえ!クボタだけじゃなくヤンママまで馬鹿にしゃがって!!」

「へっ、こんな雑魚どものために怒るとは、お前も期待出来そうに無いな、所詮雑魚は雑魚としかつるめねえって事か。」

「・・・てめえ、言わせておけば!」

「待て!、今の言葉を取り消せ!!」

オレが怒る前に怒ったのはヒカルだった。

「お前、あがたヒカルか・・・」

「ああ・・・」

「成る程、お前なら少しは楽しめるかもな。」

「お前は必ずオレが倒す・・・!」

「ははは、楽しみにしてるぜ、あがたヒカル!」

『・・・ふん!』

『・・・あの野郎。』

タツノスケはステージを降りていった。

「タツノスケか・・・ヒカル、お前が二回勝てばあいつと当たるんだな。」

「うん・・・」

現れた謎のメダロッター、タツノスケ。

一体この大会の行方はどうなるのか・・・？

Memory Disc9へ続く・・・

Memory Disc 8 激闘！町内大会！ (I) (後書き)

なんか八話目短かったような・・・  
でもここで切った方が面白いかな・・・と。

では次回もお楽しみに！

（ノシ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5842y/>

---

メダロット+

2011年12月16日23時54分発行